伝道研究会（12 月 4 日）
「天理教の異文化伝道における「日本」の語りの問題について」

加藤　匡人

本発表では、天理教の異文化伝道における「天理教」と「日本」の関係性をめぐる言説（「天理教は日本的である」等）を主題として取り上げ、そういった言説にまつわる問いに向き合うための方法論について考察した。

この問い自体は、異文化伝道研究において決して新しいものではないが、この研究領域における共通の問いとして地域横断的に考察する研究はこれまで見られなかった。それを踏まえて、本発表では（一）日本という言葉の多義性、（二）教義言説における言説的空白、（三）コンテクストによる「日本」の意味付けの違いという 3 点から、方法論的な議論の展開を試みた。

一つ目の日本という言葉の多義性については、「日本」という言葉が「天理教」に結び付けられる時、それが「特有の性質」、「所在」、「出自」のどの側面を指し示すのかを見極める必要性について論じた。

二つ目の教義言説における言説的空白については、現行の公式教義においては、「日本」にまつわる地理的、歴史的、文化的特性とは無縁の領域で教義言説が展開されていることに触れ、その言説的な空白を埋め合わせるのは個々の信者の解釈に委ねられている点について論じた。

三つ目のコンテクストによる「日本」の意味付けの違いについては、ある教信者が「天理教」のある側面を指して「日本」のものであると語る時、その意味付けは語りが生起する文化・社会的文脈によって大きく異なり得る点について指摘した。

これらの考察から、「天理教」と「日本」の関係性にまつわる語りに向き合う時、少なくとも上記の三つの側面を含めた様々な要因が折り重なって生起する重層的な語りであることを認識する必要性を指摘した。

第 336 回研究報告会（12 月 22 日）
「国際的な法規範についての一考察―国際刑事裁判規範をめぐる EU とアメリカの政策を中心に」

小松崎　利明

第二次世界大戦終結後のいわゆるニュルンベルク裁判と東京裁判を嚆矢として、他国への侵略や戦争犯罪、またジェノサイドや人道に対する犯罪など、こんにち国際人道法と呼ばれる国際的な法規範を犯した個人の責任を「国際社会」が裁判という手段を通じて追及するというのが世界的な潮流となっている。1998 年に創設された国際刑事裁判所（ICC）はその一つの到達点といえるものであり、そこには、平和を脅かす重大な犯罪を行なった者は必ず裁かれなければならない、国家主権という壁に守られて免責されてはいけない、国際社会はこのために協力してあらゆる努力を試みなければならないといった規範が具現化されている。

本報告では、こうした国際刑事裁判規範に対して欧州連合（EU）ならびにアメリカがどのような態度をとっているかを検討することを通じて、国際法がもつ規範性が国際政治上の権力作用によって毀損される状況があることを指摘した。

第 337 回研究報告会（1 月 29 日）
「外国につながる子ども・若者の主体性を育むために
―これまでのフィールドワークの経験を振り返って―

杉山　晋平

報告者は、社会教育・生涯学習という視点から、多様なメンバーやコミュニティ、文化が交わる中で生まれる人間の学習過程や創造活動に関心を寄せ、フィールドワークを通じた実践研究に取り組んできた。その中から「外国につながる子ども・若者の学びと成長」をテーマに取り組んできたフィールドワークの経験を振り返り、その到達点と課題を報告した。

報告者のフィールドワークは、中学校や定時制高校、地域の日本語教室や居場所づくり実践など、当該の子ども・若者を追跡しながらいくつかの現場や実践を横断し、継続的に展開してきたものである。そこで向き合ってきたのは、言語的・文化的な多様性を生きる存在であるがゆえに葛藤を抱えていく当事者の姿であり、それを集団的に乗り越えようとする中で生まれる拡張的な学習活動の潜在力であった。報告後には、リテラシーの概念理解、世代間の相互作用、言語的・文化的モザイクの課題、多様性が尊重される共生社会のあり方等、多くの貴重なコメントをいただいた。今、新たなフィールドワークの準備を進めている報告者にとって、どれも大変刺激的で示唆に富んだご助言であった。

思い返せば、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、研究計画も繰り返し変更を迫られ、学会や研究会も停滞やオンライン化を余儀なくされた、辛い 1 年であった。そのような中、互いの研究の進捗や成果を聴き合い、自由闊達に議論が交わされる研究会がすぐ身近にあることにこの上ない喜びと幸せを感じた。今回、報告の機会をいただけたことに心から感謝を申し上げたい。

『グローカル天理』合本、バックナンバーについて

2017 年以降に出版された『グローカル天理』の合本を頒布しています。これは各 1 年分（12 号分）を 1 冊にまとめ、簡易製本したものです（頒価は 200 円）。またバックナンバーも、希望者に無料でお分けしています。

ただし、合本はご注文を受けて製本しており、またバックナンバーは在庫を確認する必要がございますので、希望される方は、必ず事前に電話、FAX、もしくは E メールでご連絡くださるようお願いいたします。

なお、お持ち込みによる『グローカル天理』の合本はしておりませんので、予めご了承ください。

問い合わせ先：
〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050
天理大学 おやさと研究所『グローカル天理』編集部
TEL・FAX　0743-63-7255
E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp